



The Lost Girl 試論 : lostの意味について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2012-11-07 キーワード: 作成者: 石田, 洋至 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00002527

The Lost Girl 試論

—“lost”の意味について—

石 田 洋 至

I

D. H. ロレンスの長編小説 *The Lost Girl* は、1920年ロンドンの Martin Secker 社から出版された。したがって、一般的には、*The Rainbow* (1915年出版)、*Women in Love* (1920年出版) に続く作品と考えられがちであるが、実際には、複雑な過程を経て完成された作品である。1913年4月、ロレンスは Edward Garnet 宛の手紙⁽¹⁾で「*Sisters* (この題名の小説は後に *The Rainbow*, *Women in Love* と分けて出版されている) の完成が間近になっていると同時に、*The Insurrection of Miss Houghton* という題名の小説の200頁を書き終えた。」と述べている。更に、1920年5月、Lady Cynthia Asquith 宛の手紙で “I’ve actually finished my new novel. *The Lost Girl*:...”⁽²⁾とも述べている。このように、*The Lost Girl* は1913年に起稿され、何年かの空白期間の後、1920年に脱稿されたように思われる。こうした事情にもよるのであるが、この作品には、イギリス小説の手法の伝統にのっとっていると言われていた初期の作品の特徴も現れているし、*The Rainbow*, *Women in Love* に見られるテーマも出ているし、リーダーシップ小説と言われていた *Aaron’s Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent* の特徴も含まれている。また、ヒロイン Alvina Houghton の変化は、他の小説中のヒロインの変化とも類似している。特に注目し値するのは、*The Lost Girl* は内容においても構成においても *Lady Chatterley’s Lover* と特に似た点があることである。Julian Moynahan がこのふたつの小説を同じテーマのもとで扱い

The Lost Girl and *Lady Chatterley’s Lover*, separated in their publication dates by an interval of eight years, are closely related thematically and with respect to their central dramatic movement.⁽³⁾

と述べて、このふたつの小説がロレンスの特質を最も良く表現しているものと考えている理由もここにあるのである。

1920年以後、ロレンスはいわゆるリーダーシップ小説へと進み、1928年の *Lady Chatterley’s Lover* に至るのであるが、すでに、1920年出版の *The Lost Girl* に、*Lady Chatterley’s Lover* に極めて近いテーマや構成が現れているという事実注目しながら、*The Lost Girl* の “lost” の意味は一体何であるのかという点を中心に、この小説を論じようと思う。

II

ヒロイン Alvin Houghton はどのような育ち方をしていたのであろうか。彼女のまわりにはどのような人間がいたのであろうか。人間にとって本質的なもの、生命的なものを否定し、高い精神性、道徳、知性を強調するばかりでなく、それらを唯一無二のものへと絶対化する中産階級独自の観念——ロレンスによればこれがマス化された現代人の特質なのであるが——を生きることの支えとしている Miss Frost, Miss Pinnegar, 母親の Clariss Houghton がいる。"one continual fantasy for himself, a fantasy of commerce"⁽⁴⁾に取り付かれ、究極的には、現代産業主義の必然的帰結である金を手に入れるという成功を目指し、衣料品店、Throttle-Ha'penny という名の炭坑、Houghton's Endeavour という、地方まわりの演劇一座を相手に興業する劇場を経営するといった具合に、次々と仕事を変えるが、しかしすべて失敗に終わってしまう父親 James Houghton がいる。ロレンスの書き方には、彼に対して同情的なところもあるが、所詮 Miss Frost らのシルエットにすぎず、写真というポジティブとネガティブの関係であり、読者に対しては、同じ枠の中にいる人間であるという点で、同じ絵を写し出すのである。本来、人間が人間として生きるために必要なものを阻害する病原菌の巣くう Manchester House, Woodhouse, 更には England という環境の中で Alvin は育てられていたのである。こうした登場人物、環境の設定は、*Lady Chatterley's Lover* の Constance Chatterley に対する Clifford Chatterley, Wragby Hall の存在を想起させるのである。

Alvin Houghton は、一見、中産階級の娘たちに見られるふつうの娘に育っているように思われる。しかし Miss Frost らにとって気掛りなことがあった。それは、"that odd ironic tilt of the eyelids"⁽⁵⁾, "beautiful grey-blue eyes over which the lids tilted with a very odd, sardonic tilt"⁽⁶⁾, "a gargoyles look"⁽⁷⁾ という表現に見られるような、Alvin の目、顔に現れる表情である。こうした表情が自分に現れてくることを Alvin 自身は気付いていない。しかし、こうした表情、視線を向けられると、Miss Frost らは不安にかられるのである。なぜなら、それは、高い精神性、道徳、知性を糧として生きている Miss Frost, 父親、母親——まさしく母親を侵している精神の病は、これらがもたらす害悪の象徴となっているのである——に対して向けられているからなのであり、それ故、宿命的に Woodhouse に巣くう "odd women, unmarried, unmarriageable women, called old maids"⁽⁸⁾ への道を否応なしに選ばざるをえない婦人たち、すなわち、Miss Frost のような生き方をしている人間に対する冷やかな表情であり、視線だからである。更に、それは Alvin 自身、Manchester House, Woodhouse にいる限り、こうした道を歩まなければならないことに対する自嘲の現れであり、無意識の抵抗の現れであるからなのである。

このことの具体的例証は Alexander Graham の登場にある。Alvin と恋愛し、一時は婚約までするこの男は、Miss Frost とは対立する生き方の人間である。Alexander Graham に惹かれる面と、Miss Frost の影響の下にあるという面の両面が Alvin にはある。

In her periods of lucidity, when she saw as clear as daylight also, she certainly did not love the little man. She felt him a terrible outsider, an inferior, to tell the truth. She wondered how he could have the slightest attraction for her. In fact she could not understand it at all. She was as free of him as if he had never existed. The square green emerald on her finger was almost nonsensical. She was quite, quite sure of herself.

And then, most irritating, a complete *volte face* in her feelings. The clear-as-daylight mood disappeared as daylight is bound to disappear. She found herself in a night where

the little man loomed large, terribly large, potent and magical, while Miss Frost had dwindled to nothingness. At such times she wished with all her force that she could travel like a cablegram to Australia. She felt it was the only way. She felt the dark, passionate receptivity of Alexander overwhelmed her, enveloped her even from the Antipodes. She felt herself going distracted — she felt she was going out of her mind. For she could not act.⁽⁹⁾

Alvina は、Miss Frost が期待するようには決して育ってはいなかったのである。Alvina は Miss Frost の世界と Alexander Graham の世界との間を揺れ動いている存在なのである。ここに Alvina の Miss Frost の影響からの脱出の可能性が、Alexander Graham との結婚には至らなかったにせよ、秘められているのである。

こうした Alvina を Miss Frost らは放任できないのである。なぜならば、“dark in colouring”⁽¹⁰⁾、“dark blood in his vein”⁽¹¹⁾ というように “dark” な Alexander Graham の存在の容認 —— Alvina が彼と結婚するという事 —— は、自分たちの存在の否定につながるからである。そして逆に “dark” の烙印を彼に押すことによって彼を否定しなければならないからである。したがって、Miss Frost らは自分たちの世界から離別し、Alexander Graham の世界へと入っていく可能性のある Alvina を無理やりもとの世界に連れ戻すため最大の努力を尽し、Alvina に結婚をあきらめさせたのである。このように Miss Frost によって示される中産階級の世界と、Alexander Graham によって示されるロレンスの目指している世界との対立は、Alvina の顔、目に現れる表情に対する反応のし方によっても明らかなのである。

She kept her look of arch, half-derisive recklessness, which was so unbearably painful to Miss Frost, and so exciting to the dark little man. It was a strange look in a refined, really virgin girl — oddly sinister. And her voice had a curious bronze-like resonance that acted straight on the nerves of her hearers: unpleasantly on most English nerves, but like fire on the different susceptibilities of the young man — the darkie, as people called him.⁽¹²⁾

Miss Frost の世界と Alexander Graham の世界 —— 後に Cicio の世界となるのだが —— の対立と、その間を揺れ動きながらも人間にとって本質的な世界へ近づいていく Alvina の姿は、*Lady Chatterley's Lover* における Clifford の世界と Mellors の世界の対立、そして一方の世界から他方の世界へと変化しながら進んでいく Connie の姿そっくりなのである。

Alexander Graham が去って一ヶ月後、Alvina は、“I'm buried alive — simply buried alive.”⁽¹³⁾ と言って、助産婦 (maternity nurse) になる決心をし、Manchester House, Woodhouse から出ていくのである。これは明らかに彼女の意識の目覚めであり、助産婦になるということは、階級的にも下位に属するということでもあり、中産階級に対する反抗であり、挑戦でもある。したがって、Alvina が助産婦になるということは、Miss Frost の立場からすれば、階級的に “lost” という言葉が Alvina に当てはまるのである。当然、Miss Frost は反対する。だが Alvina が真の生命に満ちた生き方をするためには、中産階級の縮図ともいべき Manchester House から抜け出さなければならない。Alvina は自分の意志を押し通したのである。少なくとも、Woodhouse を出て Islington で社会の底辺にたむろする人々を相手に助産婦としての訓練を受ける Alvina は、生き生きとした暮らしをしてお

り、肉体も充実した変化をするのである。こうした Alvina の変化をまのあたりに見た Manchester House の人々は衝撃を受けるのである。

Imagine that this frail, pallid, diffident girl, so ladylike, was now a rather fat, warm-coloured young woman, strapping and strong-looking, and with a certain bounce.⁽¹⁴⁾

しかし、再び Manchester House で生活をする Alvina はもとの姿に戻ってしまうのである。この Alvina の変化は Wragby-Hall での生活で活力を失い、やせ細っていく Connie が森での Mellors との交りを通じて生き生きとした生命を取り戻していく姿そのものなのである。

Alvina の変化の意味は何であろうか、Alvina が意識していようかまいが、これは中産階級からの脱出であり、中産階級の否定であり、“Time for Miss Frost to die.”⁽¹⁵⁾ の予測である。そして Miss Frost、母親の死は、Alvina の新しい出発への契機を与えるものであり、また中産階級的属性の終末を意味するものである。ふたりの女性の死に対する Alvina の態度は冷淡である。これは中産階級の宿命を負って生きざるをえなかったふたりの女性の生き方と、これに対立して生きていかなければならない Alvina の宿命との違いによるのである。更に父親の死、Manchester House の崩壊によって、Alvina を取り巻く環境の障害は除去される。次に問題となるのは、Alvina がおのれの内部にある Miss Frostらによってはぐくまれた中産階級的資質を克服することができるかどうかという点である。

III

James Houghton が自分の夢を実現させるために最後の努力を試みたのが Houghton's Endeavour という劇場の経営であった。Miss Frost、母親、父親の死後、Alvina の生き方に大きな影響を与える Cicio の属する The Natcha-Kee-Tawaras という演劇一座が登場するのはこの時である。Alvina は Manchester House に住む女性たちの宿命をまともに受けてきていたのである。

Alvina fell again into humility and fear: she began to show symptoms of her mother's heart trouble.... She was withering towards old-maiddom.⁽¹⁶⁾

このままであれば、Alvina は Miss Frost のような運命をたどらざるをえないであろう。ロレンスの小説は、例えば、*Women in Love* の Birkin 的なものと Gerald 的なものとの対立、*Lady Chatterley's Lover* の Mellors の世界と Clifford の世界との対立といったように、“life” と “anti-life” との対立が主要なテーマとなっている場合が多いが、*The Lost Girl* もこれに当てはまると言える。中産階級によって示される人間に対する反生命的態度を否定して生きる人物を描くには、いわゆる常識の枠の中にいる人物の姿としては描きえないのである。中産階級の意識、感覚を持つもの（読者一般をも含めて）にとって Alvina は違和感を与えるであろう。ここに “lost” のひとつの意味があるし、こうした Alvina の設定にロレンス自身極めて意識的である。

There was no hope for Alvina in the ordinary. If help came, it would have to come from the extraordinary. Hence the extreme peril of her case. Hence the bitter fear and humiliation she felt as she drudged shabbily on in Manchester House, hiding herself as

much as possible from public view.⁽¹⁷⁾

生命を尊重する生き方をする Alvena に必要なものは、中産階級の中にはもはやなく、常識の枠外にしかないのである。こうした宿命を背負って Alvena は生きなければならないのである。これを可能にするように設定されているのが Manchester House の崩壊と Cicio の登場なのである。

The Natcha-Kee-Tawaras 一座は Madam Rochard という女性を座長とし、四人の若者 Max, Geoffrey (Gigi), Louis, Francesco (Cicio) から成っており、インディアン劇を得意としている。これらの座員の関係は、*Aaron's Rod*, *Kangaroo*, *The Plumed Serpent* でロレンスが主張している人間関係である。特に、Alvena が一座に加わる時の儀式は、*The Plumed Serpent* で Kate が Quetzalcoatl に加わる際執り行なわれる儀式そのものであると言ってもよいのである。Cicio は Alvena が中産階級の生き方から抜け出すために不可欠な存在であり、階級的な立場からすれば、もう下ることのない社会の底辺に住む人物であるが、生命的な生き方をできる可能性を秘めているという点では、Alexander Graham の変身としての存在であると言えるのである。

Alvena, Cicio のふたりは、初めての出会いの時からたがいに惹かれ合う。これは Alvena が馬を扱う Cicio の姿の中に現代人が失ってしまっている生命的なものを見いだすからであり、Cicio も Alvena の現実の自己の否定を感じとるからなのである。ふたりの間を急速に接近させるように設定されているのが、Cicio と Max が喧嘩をし、Cicio が一座を飛び出し、一座の誰もが Cicio を連れ戻せないでいる時、Alvena は Cicio を説得する役目を自ら買って出て、成功するという場面である。ふたりにとって理屈は問題ではないのである。Alvena は論理的な説得はしない。Alvena は Cicio に対して、“Won't you come?”,... “Do come !”,... “Won't you?”,... “Won't you come?”,... “You will come, won't you?”,...⁽¹⁸⁾と言っただけである。Cicio は一言も喋らない。ふたりの理解は論理や理屈によるのではなく感覚によるのである。ふたりの顔に現れる表情の相互理解なのである。

Alvena は階級的相違を Cicio との間を感じながらも彼に惹かれるのである。彼は階級的には Alvena の足元にも及ばない。しかし腐りきった中産階級的なものは Cicio にはない。それは文明に汚されていない原始の無垢の生命を保っている Cicio の姿なのである。

...a dark, mysterious glamour on his face, passionate and remote. A stranger — and so beautiful.⁽¹⁹⁾

The forward drop of his head was curiously beautiful to her, the straight, powerful nape of the neck, the delicate shape of the back of the head, the black hair. The way the neck sprang from the strong, loose shoulders was beautiful.⁽²⁰⁾

What physical, muscular force there was in him.⁽²¹⁾

しかし、Manchester House という現実と、そこから脱却しなければならないという意識の間を常にさ迷い続けていた Alvena は、ここで初めて新しい方向へ進むための決心をする。つまり、父親 James Houghton が死んだその日——これは Manchester House そのものの崩壊でもあるが——Alvena と Cicio は結ばれるのである。これは中産階級の規範からすれば、まさしく Alvena の墮落であり、中産階級からの脱落であり、“lost”の烙印を押されるべき行為であった。*Lady Chatterley's Lover* の Connie と Mellors の結びつきもこの意味では同種のものなのである。しかし、Alvena に

とって墮落なのであろうか。中産階級の見地からすれば墮落に違いないであろうが、彼女にとっては、中産階級の中で生れ育った過程で失ってしまったものを取り戻すための再生への第一歩ではなかろうか。

Alvina は Manchester House とそこに付随するものをすべて処分し、The Natcha-Kee-Tawaras 一座に参加する。しかし、Alvina が過去との完全なる決別をし、中産階級の特質をすべて自己の内部から除去できたかと言えば、必ずしもそうではない。なぜなら、一方では Cicio に惹かれながらも、

...the glimpse of his head was enough to rouse in her that overwhelming fascination, which came and went in spells.⁽²²⁾

In his eyes was a deep, deep sun-warmth, something fathomless, deepening black and abysmal, but somehow sweet to her.⁽²³⁾

他方、中産階級の意識で彼を見ているというところもあるからである。

And almost inevitably the old Woodhouse feeling began to steal over her, she was glad they could not see her, she was a little ashamed of Cicio. She wished, for the moment, Cicio were not there.⁽²⁴⁾

ロレンスの意図は、Alvina が現実否定という勝利を収め、彼女自身の内部の揺れを克服することを目指すことであった。しかし Alvina の揺れは止まらず続くのであり、最後まで続くのである。また Alvina と Cicio の関係が決定的なものにならない理由に、Cicio 自身も Alvina との階級的な差を意識していることもあるのである。

中産階級の立場から Alvina の行く末を見届ける役目のこれまた "old maiddom" である Miss Pinnegar は Alvina と Cicio の関係を知った時、"You're a lost girl!"⁽²⁵⁾ と極め付け非難する。これに対し Alvina は、"Woodhouse has nothing for me any more."⁽²⁶⁾ と言い切り、Cicio の側へかなり寄っていくように思われる場面もある。

The Natcha-Kee-Tawaras 一座に加って見た Alvina ではあるが、自分がその一座において異質な存在であることに気付く。一座はスパイ容疑で付け狙われたこともあって Alvina に冷やかになる。Cicio でさえもそうであった。Alvina は一座を去り、再び助産婦として働くことにした。ここで知り合った Dr. Mitchell に執拗に結婚を申し込まれ、しぶしぶこれを受ける約束をする。しかし再び Cicio と出合った Alvina は正式に彼と結婚し、イギリスを去り、イタリアへ向けて出発するのである。ドーヴァー海峡から見たイギリスは、"like a long, ash-grey coffin, winter, slowly submerging in the sea"⁽²⁷⁾ と説明されており、Manchester House, Woodhouse のみならず、イギリス自体も生ける屍を入れる巨大な棺として Alvina の目に映ったのである。そしてイギリスでは不可能な再生への道を求めるためイタリアへの旅に出るのである。

And for the first time she realised what it was to escape from the smallish perfection of England into the grander imperfection of a great continent.⁽²⁸⁾

これはまさしく、ロレンスが流浪の旅に出る心境と符合しているのである。

IV

Alvina と Cicio が落ち着くことになった場所は、イタリアの山奥にある村である。ここは他の人間が訪れることも稀な、貧しく、不潔な場所であった。ここが果して本当に Alvina が再生への道を歩むのに最適な場所なのであろうか。Cicio を信じてこの場所で永遠に暮せるのであろうか。ロレンスはこの点について自信がないように思われる。勃発した第一次世界大戦へのイタリアの参加で、Cicio 自身も兵隊として参加しなければならなくなった。彼は喜んで参加する。こうした Cicio に Alvina は深い疑念を抱きながらも、必ず生きて帰るよう説得する。そして帰還後アメリカでやり直す約束をふたりはする。しかしこの結末には読者に対して説得力がない。ロレンスは、Alvina に自信を持っていないのである。Alvina は揺れを止めることはできなかったのである。

She felt she was quite, quite lost. She had gone out of the world, over the border, into some place of mystery. She was lost to Woodhouse, to Lancaster, to England — all lost.⁽²⁹⁾

THERE is no mistake about it, Alvina was a lost girl. She was cut off from everything she belonged to.⁽³⁰⁾

Alvina に付けられた“lost”という形容は、彼女の中産階級からの脱出と共に、再生の意味も含まれていなければならない。しかし Alvina には再生の意味や、どう再生するのかがわからないのである。こうした意味でも Alvina は“lost”なのである。これはロレンスの意図とは異なる結末であろうと思われる。ロレンスの意図は、Alvina が中産階級的立場からは“lost”であったとしても、再生、不死鳥のイメージへと進む真に生命的な生き方を彼女にさせることにあったと思われる。しかし最後まで Alvina の内部の揺れ、つまりロレンス自身の自信のなさが続いている。Cicio についても *Lady Chatterley's Lover* の Mellors のような安定感を読者に与えてはいない。*Lady Chatterley's Lover* の Connie と Mellors の関係に見られるような安定感と希望を読者に与えない終り方をしている。こうした意味からも *The Lost Girl* は“lost”のままに終わっている。つまり Alvina は、中産階級と生命的なものとの間をさ迷い、揺れ続けている女、“a lost girl”そのものではなかろうか。Alvina を“lost”の状態から脱出させるためには、ロレンスにとって、*Aaron's Rod*, *The Plumed Serpent*, *Lady Chatterley's Lover* へと至る過程が必要なのであったと思われる。

<注>

- 1) Moore Harry T., ed., *The Collected Letters of D. H. Lawrence vol. 1.* (Heinemann, 1967) pp. 199—200.
- 2) *Ibid.*, p. 628.
- 3) Moynahan, Julian, *The Deed of Life; The Novels and Tales of D. H. Lawrence* (Princeton University Press, 1963) p. 117.
- 4) Lawrence, D.H., *The Lost Girl* (Heinemann, 1961) p. 3.
- 5) *Ibid.*, p. 20.
- 6) *Ibid.*, p. 21.
- 7) *Ibid.*, p. 21.
- 8) *Ibid.*, p. 1.
- 9) *Ibid.*, pp. 24—25.
- 10) *Ibid.*, p. 22.
- 11) *Ibid.*, p. 22.

- 12) *Ibid.*, pp. 23–24.
- 13) *Ibid.*, p. 28.
- 14) *Ibid.*, p. 35.
- 15) *Ibid.*, p. 36.
- 16) *Ibid.*, p. 83.
- 17) *Ibid.*, pp. 86–87.
- 18) *Ibid.*, p. 164.
- 19) *Ibid.*, p. 167.
- 20) *Ibid.*, p. 170.
- 21) *Ibid.*, p. 172.
- 22) *Ibid.*, p. 217.
- 23) *Ibid.*, p. 218.
- 24) *Ibid.*, p. 223.
- 25) *Ibid.*, p. 224.
- 26) *Ibid.*, p. 225.
- 27) *Ibid.*, p. 303.
- 28) *Ibid.*, p. 307.
- 29) *Ibid.*, p. 316.
- 30) *Ibid.*, p. 324.

(本学講師・旭川分校)